

F-11 家庭経営の変動に関する生活史的研究—家計構造の推移を中心として—
福島大教育 岡村益、桜聖母短大 壁谷沢万里子、郡山女大 小林和子
深谷笑子、宮城学院大 横山シヅ、岩手大教育 ○後藤和子

目的 本報告は主題の調査研究の一環として行なうものである。今回は福島市に隣接し、養蚕地域として栄えてきた保原町の旧家、M家の家計簿を分析した。二世代にわたる直系家族の家庭経営の変動とみるために、家計構造の推移と家族周期および社会経済的な変化による影響を検討する。

方法 M家所蔵の36年間（大正12年～昭和33年）の「家計仕訳日記帳」に記載されている収支項目を家計費と経営費とに分け、費目別、種類別の項目に分類集計し、所得と家計費の推移および消費構造を明らかにした。その際、農業依存度、家計充足率の増減傾向、家計費の推移と家族周期との関係、下況・戦争・敗戦・占領・民主化等の激動の中にあつて、家計がいかに変動し、家庭経営上どんな配慮がなされたかを検討した。

結果 M家は稲作、畑作、養蚕による農業所得および世帯主の勤労収入、貸金利子、小作料等の財産所得などの現金収入が相当多い。戦前は農業依存度が高く、家計充足率は100%以上であつたが、農地解放後は20%前後になり、30年以降は^{30%}に転じている。農業所得の低下は世帯主の銀行重役、村長の勤労収入の増加や以前貯えた株や預金利子によつて補われ、高い現金収入が維持されている。第二次大戦による二男の戦死、戦病による長男の長い闘病生活等の影響も家計費にみられる。また戦前は子女が婚出していく縮少期にあたり被服費の割合が比較的高く、戦後は食料費と充
際費の比率増加等、消費構造にも終戦を契機として著しい変化がみられる。